

第44回むつ市福祉作文コンクール開催要綱

- 趣 旨 少子高齢化の急速な進行に伴い、核家族化の進展、女性の社会進出の増加などを背景として、児童や家庭を取り巻く社会環境は大きく変化しているなかで、次代を担う子供達が福祉の心を持つことは、とても大切なことであると思われます。ついては、この福祉作文を通して人間性豊かな子供達の成長を期待し実施いたします。
- 主 催 社会福祉法人むつ市社会福祉協議会
- 後 援 むつ市教育委員会 下北国語教育研究会 一般社団法人公済会
- 日 時 平成26年2月23日(日) 14:00～15:00
- 会 場 下北文化会館「大集会室」
むつ市金谷一丁目10番1号 電話0175(22)8411
- 作文内容 高齢者、障がい者、家族及びボランティア活動等
「思いやり、いたわり合い」について書かれた内容であること。
- 参加者 入賞児童・生徒及び保護者、関係教職員、
むつ市社会福祉協議会役員・評議員ほか
- 日 程 開 会
主催者挨拶 むつ市社会福祉協議会会長 長 濱 操
表彰状授与
お祝いの言葉 む つ 市 長 宮 下 順一郎 様
む つ 市 議 会 議 長 山 本 留 義 様
優秀作文朗読 最優秀賞受賞者5名
審査講評 下北国語教育研究会会長
風間浦村立蛇浦小学校校長 川 畑 恵 子 様
閉 会

目

次

講評 「幸せな社会実現を考える機会に」

下北国語教育研究会会長
風間浦村立蛇浦小学校校長

川畑恵子 1

最優秀賞の部

「ボランティアあって、たのしいよ」

第一田名部小学校 一年 金子 藍 4

「高齢者と接して感じたこと」

大湊中学校 一年 柏崎 瑞仁 5

「祖母との思い出」

関根中学校 一年 坪 菜摘 7

「共に生きる」

大湊中学校 二年 二本柳 萌 8

「お年寄りから学んだ事」

近川中学校 二年 濱中 真央 9

優秀賞の部

「大せつなトイレ」

苫生小学校 一年 川西 笑未 11

「おばあちゃんのために出来ること」

脇野沢小学校 五年 祐川 花菜 12

「笑顔の力」

大湊中学校 一年 白取 一登 13

「平等な世界へ」

むつ中学校 一年 武田 亜幸 14

「たった一言で」

関根中学校 一年 野邊地 璃々 15

「音でつなぐ心」

大畑中学校 一年 石橋 みゆり 17

佳作の部

「車イスにかわるプルタブ」	第二田名部小学校	二年	竹林	琉那	19
「私のしょう来の夢」	苦生小学校	四年	大林	優沙	20
「安心して生活するには」	第三田名部小学校	五年	長谷川	和輝	21
「ありがとう」	関根小学校	六年	駄賃場	穂南	22
「ボランティア」	大湊中学校	一年	武田	晴海	23
「今できること」	大湊中学校	一年	藤原	紬	24
「自分達の海をきれいに」	近川中学校	一年	立花	桃香	26
「福祉」	大湊中学校	二年	木村	結衣	27
「盲目」	大湊中学校	二年	下山	詩織	28
「身近な人から」	大畑中学校	二年	片山	瑞貴	30
「ひいおばあちゃんありがとう」	脇野沢中学校	二年	北村	しおり	31

講評

幸せな社会実現を考える機会に

下北国語教育研究会会長
風間浦村立蛇浦小学校校長

川畑 恵子

今年も市内小中学生より心温まる数々の作品をお寄せいただき、第44回むつ市福祉作文コンクールが開催されましたことを心よりお祝い申し上げます。

また、「むつ市社会福祉協議会」ならびに関係者の皆さまにおかれましては、福祉という立場から子どもたちの健全育成にご尽力を賜り、学校教育を預かる一人として厚く感謝申し上げます。

さて、今回、小中学生からあわせて220点の作品応募がありました。その数が昨年度に比べ若干少なくなり寂しさを感じておりましたが、審査を進める中で、これまで以上に人と人との心を通わす作品に出会うことができ、またその場面に子どもたちの優しさ溢れる姿があったことに深く感銘を受けました。

「相手の気持ちを考えることを大切にしたい。そうすれば、みんなが安心して生活できる」「人を思いやる心を持つことが一番必要だということ」「本当の福祉とは人を笑顔にすること」「支えてくれる人がいるから生きていられる」等々。ここではその一部しかご紹介できませんが、温かな気持ちや決意を窺うことができ、この地域の明るい未来を垣間見た思いがいたしました。

ところで、今回は、日本が高齢化時代を本格的に迎えたことを裏付けるかのように、高齢者や養護老人施設に関する内容の作品が多かったのが特徴と言えます。

小学生は、祖父母など家族の姿を通して、よりよい生き方や暮らし方はどうあればよいのだろうか、快適な生活環境はどのように整えていけばよいのだろうか、身近な問題について真剣に考えることができました。

一方、中学生は、これまで社会に貢献してきた高齢者の今後の幸せな暮らしや社会づくりのために、自分たちがどのようにかわり努力すべきか追究した作品を多く寄せていました。また、「福祉とは」と真つ向から向き合った作品もありました。

昨今、学校では授業の一環として総合的な学習や職場体験学習で前述のような施設を訪問する機会が随分増えました。高齢者と目

線を合わせながら話をしたり、手や膝など身体に優しく触れたりして積極的に関わり、そしてコミュニケーションをとる様子が作品中に描かれていました。学年が進むにしたがい、また、学習機会を重ねるにしたがい、子どもたちの考えや気持ち、さらには行動にも確かな変容が生まれていることがわかります。

先日テレビを見ていたところ、偶然にも大変興味深い番組に出会いました。それは、高齢者との接し方について最新の情報を伝える報道番組でした。病気やケガで不安な思いや不快な気分になっているからといって、決して病人として接するのではなく、「見つめる」「話しかける」「触れる」「立つ」を基本に信頼関係を作りながら接することが最も大切であると伝えていました。これにより、高齢者の症状に劇的な改善を見ることができたというのです。

いま日本の医療や介護の現場では、「見つめる」「話しかける」「触れる」「立つ」を基本にしたこのフランス生まれのケアを導入する動きが広がっているということです。実に驚きました。子どもたちは誰に教えられたわけではなく、自らの経験に基づいて相手を思いやる心を大切にまさにこのケア方法同様にコミュニケーションを取り合っているのです。

体験に基づいた文章にはエネルギーが漲みなぎっているものです。それは、真実が語られているからです。また、自らの思いを文章にすることで自らの考えを確かなものとしています。こうして若い世代から、とりわけ小中学生から、福祉の輪が確実に広がっていることを実感するとともに、子どもたちに関わってくださった皆さんのご厚意に感謝し、福祉の輪をいつそう広げていくためにも体験学習の機会は大切にしていきたいものです。そして、今回、むつ市福祉作文コンクールに参加した小中学生はもとより、一人でも多くの子どもたちに文章に表現する活動を合わせて大切にしてほしいと願っています。

結びに、各校の先生方にはご多忙のなか熱心にご指導をいただきましたことに厚くお礼申し上げますとともに、次世代を担う子どもたちがよりいっそう視野を広げ、健やかに成長することを願い講評といたします。

◆「ボランティアって、たのしいよ」 第一田名部小学校 一年 金子 藍

おじさんとボランティア活動を心から楽しんでる姿が目には浮かびます。特に、本を読むボランティアでは、多くの工夫をし、作者自身の頑張りが実を結んでいることが伝わりました。ぜひ、活動の場を広げて、友達とボランティアに励んでほしいです。

◆「高齢者と接して感じたこと」 大湊中学校 一年 柏崎 瑞 仁

当たり前だったことができなくなる高齢者の姿を目の当たりにした職業体験学習。高齢者のつらい思いを素直に受け止め、介護に關して専門的な知識のない自分に何ができるのかを親身に考えた優しさの伝わる作品です。

◆「祖母との思い出」 関根中学校 一年 坪 菜 摘

祖母の存在に対する自身の思いが、徐々に変わっていった様子が丁寧な文体で書かれています。認知症という壁を乗り越え、祖母との時間を大切に過ごしていきたいという、作者の思いが伝わってくる作品です。

◆「共に生きる」 大湊中学校 二年 二本柳 萌

幼少時代に「ダウン症」の友達と出会ったことを契機として、障がい者への理解を深めていった作品。障がい者に対して偏見を持たず、お互いに明るく楽しく助け合って暮らしていこうとする前向きな姿勢に大変感心しました。

◆「お年寄りから学んだ事」 近川中学校 二年 濱 中 真 央

老人ホーム訪問の体験を通して感じたお年寄りの方々の思いを優しい気持ちで受け止め、高齢者を敬うことの大切さを素直な文体で表現しています。「いたわりあい」の精神にあふれた作品で、とても共感が持てます。

◇審査員 下北国語教育研究会

石 田 直 美 教諭（むつ市立第一田名部小学校） 浜 田 亮 子 教諭（むつ市立第二田名部小学校）

川 畑 恵 子 校長（風間浦村立蛇浦小学校） 齊 藤 靖 浩 教諭（むつ市立近川中学校）

川 口 可 奈 教諭（むつ市立川内中学校） 平 沢 和 哉 教諭（むつ市立大畑中学校）

下 山 翔 教諭（大間町立大間中学校）

最優秀賞

ボランティアアつて、たのしいよ

第一田名部小学校一年 金子 藍

私はボランティアがだいすきです。

はじめてボランティアをしたのは保育えんの時で、早かけこうえんのゴミひろいをしました。ゴミは少なかったです。

去年の七月には、じょうがさわ海水よくじょうに行つて、ボランティアをしました。

海水よくに来た人が、ケガをしないように、ゴミあつめをしました。

あきかんやペットボトルがいっぱいおちていて、びつくりしました。

大変でしたが、ゴミひろいのあと、みんなでジュースをのみ、えんそくのようにでした。

私がボランティアをはじめたのは、おじさんにさそわれたからです。

おじさんは、ボランティアの会のやくいんで、ゴミひろい

のほかにも、いろいろなことをしています。

困った人やお年よりを助けるために、いつも走りまわっています。

おじさんは月にいちど、みちのくそうに行つて、本をよむボランティアもしています。

その時に私もいっしょについて行つて、お年よりのために本をよんでいます。

行く前の日は、何回も何回もよんで、れんしゅうします。お年よりは耳のわるい人が多いので、大きな声で、ゆっくりよみます。

大きな声なので、みちのくそうで、はたらいている人も、たちどまつて聞いています。

おじさんと、わかるがわる本をよんで、どっちの方に、たくさん拍手をもらえるか、きょうそうしました。

おじさんは「ももたろう」をよみました。私は「うらしまたろう」と「したぎりスズメ」をよみました。

なぜその本をよんだかと言うと、お年よりの人が、みんな知っている昔話だからです。

おじさんも、いろいろ工夫しましたが、わたしもいろいろ工夫しました。

それは、お年よりの人は耳がとおい人が多いので、大きな声で、ゆっくり、はつきり、よむことです。

お年よりの中に、元わきの沢小学校の先生だった人がいました。

「本当にじょうずだったね」と、ほめてくれました。

よみおわって、おじさんへはくしゅした人は、一人だけで、私にはくしゅしてくれた人は、八人でした。

どっちにも、はくしゅしない人が、三人くらいいました。

お年よりの人がみんな、私の頭をなでてくれました。

かえりの車の中で、おじさんは、くやしそうなかおをしていましたが、私はとてもうれしかったです。

みちのくそうへは、まいつき、第二土曜日のごに、行くやくそくですが、つきからは、かみしばいをするつもりです。

童話の本は絵が小さく、お年よりにはよく見えないからです。

私がよむ時おじさんが絵をめくり、おじさんがよむ時は、私が絵をめくるつもりです。

今はみちのくそうだけで、本をよんでいます。べつのも、本をよんであげたいと思っています。

ゴミひろいをする、きれいになって、きもちが良いし、心がゆたかになります。

本よみは、みんながほめてくれて、よろこんでくれます。

これからも、お年よりや、こまっている人に、いろいろな

ボランティアをしたいと思っています。

友だちもさそって、いろんな所で、いっしょにボランティアできたらいいなあと思っています。

高齢者と接して感じたこと

大湊中学校一年 柏崎 瑞仁

昨年、授業の一貫として職場体験学習がありました。ぼくは、自宅の近所であり、小さいころから知っている特別養護老人ホーム桜木園で体験学習を行いました。桜木園には、曾祖母が入所していたため小さいころ祖母に手をひかれ何度か行った記憶がうつすらとありました。小さかったころには感じることや考えることもなかったことに気づき学ぶことができました。

桜木園では、はじめに施設についての説明がありました。

入所しているのは、六十五歳以上の高齢者で介護が必要なため入所し、施設の方に援助してもらいながら食事を食べたり、入浴したり、生活をしているとのことでした。食事の介助をする時には、食事の内容を説明したり、食べる速さに合わせて介助することや、次に何が食べたいかを聞きながら介助することが大切であるということを知りました。また、食

事の形状は利用者の方によって異なっていました。固形、半固形や形の無い物は流動食といい、かむ力や飲み込む力が弱くても容易に食べることが出来るように工夫されています。ぼくは普段、当たり前のように両手を使い、食べたいものを食べたいたいタイミングで口へ運んでいます。また汗をかいた後は自分で服を脱ぎ、汚れたところをゴシゴシと洗うことができます。しかし、それは健康だからできることなのだと感じるできませんでした。

レクリエーションでは、粘土遊びもしました。ぼくは粘土や工作が得意なので、入所者のリクエストに応え、犬や鏡もちなどを作りました。作り終えると拍手をくれました。しかし、一人だけ悲しそうに泣いている方がいました。ぼくは、その方に近づき話を聞きました。「私も若いときは器用でいろいろできたの…今はできなくなっちゃった。」と。ぼくは、なんだが申し訳ないような気持ちになり、今度はその方と一緒に犬を作りました。ぼくにはまだわかりませんが、高齢になり、自分の思うように話せなかったり、体を動かさないということはとてもつらいことだと思います。

桜木園の職員の方は、介護福祉士や看護師、管理栄養士、作業療法士などの資格を持っているそうです。ぼくは、はじめて知った資格もあり、どんなことをする職業なのかわかりませんでした。職場体験が終ってから、調べてみました。介

護福祉士は、日常生活を営むのに支障がある人につき心身の状況に応じた介護を行うことを業とする人のことをいいます。作業療法士は、諸機能の回復・維持および開発を促す作業活動を用いて行う治療・指導・援助を行う人のことをいいます。それぞれが自分の専門知識を発揮して、入所者の方たちが安全に、快適に過ごせるように援助しているのだということがとてもよく分かりました。

しかし、現在青森県全体で、特別養護老人施設への入所を希望している待機者は三百二十人もいます。ぼくの身近にも高齢者はたくさんいます。ぼくの曾祖母は八十三歳になります。専門的な知識はないけれども、施設に入所できない、または入所していない高齢者の方に周りの人達が優しく接してあげることが高齢者が安全、安心して暮らすことができると思います。また、自分が高齢者になったときに安心して暮らせる社会になっているように今から少しずつできることをしていきたいと思います。

祖母との思い出

関根中学校一年 坪 菜 摘

私の祖母は認知症です。それは私が生まれる前からでした。しかし、前は今ほどひどくはなく、家事などもある程度できていて、私と遊んでくれたりもしました。野球をしたり、祖母の畑仕事を手伝って一緒にじゃがいもを掘ったりしていました。

でも、私はそんな祖母のことが学年があがるにつれ嫌いになっていきました。理由は、祖母が他の家のおばあちゃんちがうからです。小学校に入り、友達になった子の家へ遊びに行くと、どの家のおばあちゃんもとてもしつかりしています。ドーナツや天ぷらなどを作って振る舞ってくれるおばあちゃんもいました。けれど私の祖母はそんなことはせずに、何もしないでただソファアに座ってテレビを見ているだけでした。母が家にいない時は祖父がご飯を作ってくれて、祖母は何もしていませんでした。

最初は、「うちのおばあちゃんは他の家のおばあちゃんと少しちがうだけだから。」と思って、今まで通り祖母と接していました。でも、そんな私の考えを変える事件が起きま

した。

祖母が家から一人でいなくなってしまったのです。そのころは、もう祖母は老人ホームに帰っていて、朝にホームへ行き、夕方に帰って来るというリズムで、段々と認知症は回復してきているように見えました。そんな時に起きたこの事件は誰にも予想することができませんでした。それは、深夜皆が寝ている時に起きました。祖母が家を出て暗闇の中、何キロもはなれた早掛の昔死んだ親戚のおじいちゃんの家まで歩いていったのです。そのとき私は寝ていたのでよく分かりませんが、パトカーがたくさん来ていたそうです。祖母は無事見つかりましたが、私はそれ以来祖母の存在が嫌で恥ずかしいと思ってしまうようになりました。

あの事件があつてから、もう祖母がこっそり逃げないようには常に鍵がかかっている状態になってしまいました。「他の家はこうじゃないのにどうしてうちだけ…」そんな思いが私の中から祖母をいない存在にできてしまっていました。

ちょうどそのころ、祖母は老人ホームに通うのではなく、入所することになりました。前のように日帰りではなく、ずっと施設に預けるといことです。私は嫌いだつた祖母が家からいなくなることへ嬉しさを感じる反面、不思議なことになくなってしまうことへのさびしさも感じていました。

祖母が老人ホームにいつてしまつてから、たまに様子を見に行く、祖母はもう昔のような元気はなくなつており、私 のことも段々忘れていつていました。

「嫌い」と思つてたはずなのに、私は小さいころの思い出を聞かれれば必ず、祖母と遊んだり、散歩したりしたことを思い出します。私はいつかもう一度祖母とそんなことができればいいなと思うようになっていました。でも、正月に祖母が帰つて来たとき、それは不可能だということを知りました。前までは少しだけでしたが、私のことを覚えていてくれたのに、もう、今では家族の中では祖父のことしか覚えていませんでした。私はすごく悲しい気持ちになりました。

私は今になつて後悔しています。祖母を嫌いなんて思つたことを。でも、そんなことを今さら思つても仕方ありません。だから昔のように一緒に笑いあえるように、祖母との思い出を少しでも取り戻せるように、これからは祖母との時間を過ごしていききたいと思つています。そして後悔することのないよう、自分の祖母だけでなく、老人の方や障がい者の方たちに優しくなれるよう、祖母が教えてくれたことを大切に、自分自身を変えていききたいです。

共に生きる

大湊中学校二年 二本柳 萌

福祉について考えた時、一番最初に頭にうかんだのは、「障害者」という言葉でした。

私が初めて「障害者」に会つたのは幼稚園のころです。同じクラスにダウン症の子がいました。その子がダウン症だということ、知つていましたが、ダウン症がどうゆう障害なのかということ、全く知りませんでした。

小学校1年生になつて、私は、ダウン症の子が主人公の映画をみました。それがきっかけで、ダウン症について調べました。

ダウン症とは、染色体異常症の1つで、23対(46本)ある染色体のうち、21番目の染色体が通常よりも1本多いことからなる、障害です。特徴としては、小頭症、低身長などがありました。でも、その特徴は大人になつてみないと、正直わかりません。子どものころは頭が小さい子も、身長が低い子もたくさんいます。なので子どもときは何も不思議に思つたことはありませんでした。でも、一緒に成長していく中で、なんとなくそのことが、理解できるようになりました。言葉

がうまく話せないことにも気づきました。

そして、いろいろなことを理解できるようになると、周りの人たちをみる目も変わりました。目が悪い人や足が悪い人がいると、気になってしまいます。小さいころは、目が悪い人が使う道路の点字ブロックなどを、ふんで遊んでいました。中学生になった今は、何のためのブロックか分かっているの、ふまないようにしています。

こうゆうことに気をつけるようになったのは、町などで「障害者」を見ると、「大変だろうな。」と思っていたからです。でも、そう思うのは、不自由な部分しか見えていなかっただけだと気づきました。よく考えると、ダウン症の子は、いつも笑顔で人気者でした。障害があっても、元気で明るい楽しい毎日を暮らしている人はたくさんいると思います。

そのことに気がつき私は、障害というのは一つの個性としてとらえていいのではないかと考えました。不自由なことはたくさんあるかもしれないが、障害があるだけであって、障害がない人と同じただの人間です。だれにでも、得意なことや、苦手なことはあります。その一つ一つが、その人の個性だと思えるようになりました。

「障害がない人と同じただの人間」と言っているだけで、悪い言い方をすると自分の中で、「障害者」というのを、差別していたのかもしれない。

福祉の意味は、「人々が満足するような生活上の環境」だそうです。障害があるのに限らず、生活していく上で、お互いの助け合いはとても必要です。自分が得意なことは人のために生かし、自分が苦手なことは人の力をかり、協力して生きていくことが大切です。

障害をもっていない人が、「障害者」にできることは、気を使うことでも、「障害者」のためだけの何かを作ることでもないと思います。

一人一人が楽しく、障害なんて気にせずに生きていける環境を一緒につくっていくことが、これからできることだと思います。

お年寄りから学んだ事

近川中学校二年 瀨 中 真 央

私たちの中学校では、老人ホームに行きお年寄りと触れ合う行事がある。今年もそれに参加した。私はどちらかというとお年寄りと触れ合うのは嫌いだ。なぜかという、話が通じ合わなかったり、いつ話が終わるのか分からないくらい話が長かったりするからだ。

今年も去年と同じようにお年寄りの前で歌を歌ったり肩た

たきをしたりした。もちろん触れ合いコーナーもある。同じことをやってればそのうち終わると思っていた。

しかし、今年の触れ合いコーナーでは、お年寄りと触れ合っ
て感じたことがある。去年はまだ一年生で緊張していたから
気付かなかつたが、今年はいろいろと気付いたし、たくさん
感じた。

一人目の方は、私が少し緊張して何も話せず焦っていたのにもかかわらず、私に明るく、そして優しく声をかけてくれた。そこで私は、本当に助かったと思っ
たし、なんだか分らないけれど「ありがたいなあ。」とも思えた。

次に出会った人には手を握ることを求められたので手を握らせてあげた。ふと手を見て、自分の手とその人の手を比べてしまった。すると、色も違うし、シワの数も違うし、大きさも違った。私は人間の体の中で手が一番寿命を感じると思っ
た。そして私とその人では全然生きてきた時間も違うのだなあと思っ
たし、その人と比べると私はまだまだ幼いなあとも思えた。

その後、私は友達と二人で何人かお年寄りが集まっている所に行っ
た。するとその人達は、楽しそうに話し始めた。

「おめんど、めんこいなあ。」
とか、

「どこさ、住んでるのさ。」

とか楽しそうに話すので、こつちも楽しくなってきた。そう思っ
ていたら、突然お年寄りの一人が涙を流し始めた。私達はとまどっ
た。友達は、

「泣かないで下さい。」

と言った。するとお年寄りは何も言わず、私達に優しく手を伸ばして
きた。私はこれしか何もすることができなかつたので、その人の膝に
優しく手をおいてあげた。私はその時点で深く考えなかつたが、学
校に戻った時に考えた。お年寄りにとって、私達子供は、生きがい
なんじゃないのかなあと。

今回の触れ合いコーナーでは、お年寄りの方々からたくさん
のことを学んだ。お年寄りが私達を見て涙を流したり、手を握つた
りするのは私達をまるで自分の生きがいであるかのように大事にし
てるからなのではないかと思う。だから、私達若者も、お年寄りを
大事にし、尊敬すべきなのだ。

今の私には、お年寄りがとても身近に感じられる。

優秀賞

大せつなトイレ

苫生小学校一年 川 西 笑 未

大きなデパートやびょういんなど、たくさんの方があつまるには、車いすの人たちがつかえるトイレがあります。わたしのおじいちゃんがよくつかっていました。おじいちゃんは、びょうきでふつうのトイレでは、うまくできないので、そのひろいトイレをつかっていました。

でも、車いすの人のトイレに、だれかがはいつていたら、またないとだめです。そのトイレは、たった一つしかないからです。まっついているとき、おじいちゃんはとてもくるしそかったです。もう一つあれば、またなくてもいいのになあとおもいました。

とおくのデパートにいったとき、そのトイレから、わたしとおなじくらいの子どもが二人でできたことがありました。車いすのつていないし、げんきな子なのに、へんだなあとおもいました。わたしのおじいちゃんみたいに、そのトイレ

でないところまる人がいるのに、げんきな子どもがつかうとめいわくなんだなあときづきました。

車いすの人のトイレは、ひろくて、つかいやすいから、だれでもつかいたくなるとおもいます。ふつうのトイレをつかえるわたしたちは、つかわないほうがいいとおもいます。

おじいちゃんが、

「むかしは、こういうトイレはすくなくったから、かんたんにおでかけできなかったんだよ。」と、おしえてくれました。

「いまは、あちこちにあるから、たすかっているんだよ。」と、いつていました。おじいちゃんはおとしなくなりました。いまでも、車いすの人のトイレを見ると、おじいちゃんをおもいだします。おじいちゃんみたいな人もいるので、車いすの人のトイレは、つかわれないようにしています。

おじいちゃんは、わたしに大せつなことをおしえてくれました。べんりなトイレは、車いすの人たちにとって、大せつな大せつなトイレだとしりました。これからもわすれないでいたいです。

おばあちゃんのために出来ること

脇野沢小学校五年 祐川花菜

私は、夏休みに、卓球部の仲間と地元の高齢者の方とゲートボールで交流しました。当日集まった高齢者の方は、十人くらいで、みなさんとても元気な方ばかりでした。みなさんは私たちが参加したことを喜んでくれ、ていねいに指導してくれました。一緒にゲートボールを楽しんだ高齢者の方は、上手に出来るかと手をたたい喜んで、失敗すると、悔しがったり、笑ったりして、とても楽しそうで、いきいきしていました。参加している方の中には、私のおばあちゃんよりも、年をとつていそうな方もいました。その方も元気にコートの中を動いたり、大きな声で笑ったりして、とても楽しそうで良いなあと思いました。

私のおばあちゃんは七十三歳で、三年くらい前から認知症という病気です。認知症は脳の病気で、色々なことを忘れてしまいます。それに、新しいことを覚えておくことができません。だから、日曜日ののに私や兄に、

「学校に行かなくて良いのか？」
と何回も聞いたり、私が、

「学校の帰りがおそいから、おばあちゃんの家によらないよ。」

と話しておいても忘れてしまい、私をさがしに外に出かけてしまいます。私は、そんなことがあると、なんでおばあちゃんはこの病気になつてしまったんだろうと、思つてしまいました。そして、おばあちゃんに

「さつきも話した。」

と、言つてしまったことがあります。そうすると、おばあちゃんには、

「ごめんね。」

と悲しそうな顔で、あやまりました。私は、おばあちゃんが、忘れてしまう病気なのに、なんでこんな事言っちゃったんだろうと、自分に腹が立ちました。父や母に

「おばあちゃんは忘れてしまう病気だけど、花菜のことを大切に思う気持ちは忘れないでね。」

と言われました。それからは、おばあちゃんと同じことを聞いても、わかりやすく何度でも同じように答えるようになります。また、学校帰りには、

「今、帰ったよ。」

とおばあちゃんの家顔を出すようにしています。そうすると、おばあちゃんは、

「おそくまで、ごくろうさんだね。」

と、安心してくれます。

おばあちゃんは、私や兄の話すことをうれしそうに聞いてくれます。学校であったことや家であったことなど、普通の話ですが、ここにこして聞いてくれます。そんなとき、私は良かったなあと思います。私にも、おばあちゃんのためにしてあげることがあると思えるからです。

私は、おばあちゃんの気持ちを考えるだけで、おばあちゃんのために、たくさんのことが出来ることに気がつきました。私は、これからも相手の気持ちを考えることを大切にしていきたいと思っています。そうすれば、みんなが安心して幸せに生活できると思います。

笑顔の力

大湊中学校一年 白 取 一 登

近年、「少子高齢社会」という言葉をテレビや新聞などでよく耳にするようになりました。

少子高齢社会とは、以前に比べて出産子数が著しく減少し、六十五歳以上の老年人口が増大する社会のことです。現在、日本の大きな社会問題の一つとなっています。少子高齢社会が進むにつれ、病院や介護施設が必要とされそこで働くたく

さんの人が必要になります。

僕は、将来、これからの時代に貢献できる福祉や医療関係の仕事に就きたいと考えています。

僕の学校では、職場体験授業というものを毎年行っており、自分が最も関心のある職場に行き、その仕事を実際に体験できる機会があります。そこで僕は迷わず、学校の近くの介護施設老人ホームに行くことを決めました。

職場体験前日から、不安と緊張でいっぱいでした。当日、職場に行くとなんかすれればいいのかわからず、ただ、職員の方の指示を聞くのが、精一杯でした。

そんな中、施設利用の中で、最年長のおばあさんとお話しをすることができました。なんと、その方の年齢は、一〇二歳だと聞き、とてもおどろきました。計算すると僕の年齢の8倍以上で、人生の大先輩です。若くて、元気な秘訣を色々聞いてみると、朝・昼・晩と三食、きちんと食事を取り、何一つ残さず食べ切るとのことでした。そして、何より、明るく・笑顔で話して下さるのがとても印象的な方でした。

施設では、色々な仕事の体験も出来ました。僕は配膳のお手伝いや、車いすの操縦の仕方など、お年寄りのことを第一に考え、行動することや、介護の大変さも学びました。又、利用者の方と一緒に紙ねん土で人形を作ったり、共に、笑顔で楽しい時間を過ごしました。

職場体験に来る前日に、お年寄りの方とどうやって接したらいいのか、どんな話をしたらいいのかと不安な気持ちで挑んだ気持ちがお年寄りの方と接した事で、おだやかな気持ちに変わりました。

そこで、福祉というのは、きちんとした介護や、体を使ったりハビリだけでなく、相手や、周りの人を笑顔にするのが、本当の福祉だということを、この時、初めて思いました。

このようなことは、僕の日常生活にも共通することだと思います。今までの僕は、ちよつとした言葉や、態度で人を傷つけたり、困った人を見かけても面倒くさいと思い、つい見えて見ぬふりをしていたかもしれません。

これからは、今までの自分を少しずつ変えていこうと強く思いました。

この職場体験を通して、人を思いやる心と、やさしい心を持つことが、一番必要だということを学び、とてもですが新しい気持ちで職場体験を終えることができました。

本当の福祉とは、人を笑顔にすること。この言葉を目標に、僕は、これからたくさん勉強し、社会に貢献できる立派な大人になりたいと思います。

平等な世界へ

むつ中学校一年 武田 亜幸

ユニセフ。みなさんは、この言葉を知っているだろうか。一度は聞いたことがあるだろう。ユニセフとは、「世界中の子どもたちの命と健康を守るために活動する国連機関」のことだ。

ユニセフ支援活動なども行われている。例えば、募金。ユニセフ募金は、多くの国で行われている。寄付されたお金がどこに行くのか。それは、開発途上国への保健・栄養・水や衛生・教育・保護・緊急救援など、さまざまだ。募金には、百円以内でできることだつて沢山ある。一円では、はしかなどによる合併症を予防・治療するカプセルが一錠できる。五十七円では、一錠で四、五リットルの水をきれいにすることができる洗浄剤五十錠になる。このように、少しの寄付でも、とても大切な大きなものになる。募金で、「自分のお金がなくなるから募金したくない」と思ったり、「一円くらいなら募金しなくてもいいでしょ」と思う人がいるかもしれない。だが、それは間違っている。たった一円でも、世界の子どもたちにとってはかけがえのない一円なのだ。世界には、

援助を必要とする国が三十か国以上もある。その国を助けようと、百五十の国がユニセフ協会に入っている。

このように、世界には「助け合い」という言葉が大切だと思う。開発途上国が困っていると、先進国が助ける。これは、人間関係と同じだ。困っている人がいれば、それを助ける人がいる。これは、本当に大切なことだと思う。

私は、友達と一緒にいるときにユニセフ募金に寄付をしたことがあるが、そのときのことを今でも覚えている。「あゆ、前からこの募金したがってたもんね。募金できてよかったね。募金をしたと思うって、あゆすごいよね。」と、友達に言われた。なんとなく、嬉しい気持ちになった。今までの私の気持ちを思い出した。私は、小学六年生のとき、社会でユニセフについて勉強した時から、「絶対にユニセフ募金に協力したい」と、強く思っていた。自分のおこづかいだけでこんなにも多くの子供たちを救えるなんて、こんな自分でも役に立てるんだ、そう思った。

いくつかの低所得国では、五歳未満の障がい児の死亡率が八十パーセント以上という国もある。二十パーセントの確率でしか、生きられないということだ。そして、人身売買されている国もあるのだ。人を売る、買う、そんなものが許されるのか。人はものではないのだ。開発途上国を中心として、毎日二万五千人が死んでいる。その中で子供は、「六秒に一

人が死んでいる」と言われている。こうして私たちが楽しい日々をおくっていたり、満足いくまでご飯を食べている間に、他の国で亡くなっている人は大勢いる。この世界には苦しんで苦しんでやつとの思いで生きている人や、何不自由なく人に頼って生きている人など、正反対の暮らしをしている人間がいる。

私は、こんな世界はいやだ。全ての国が平等であってほしいと思う。どこかの国がとても裕福、どこかの国はとても貧困。こんなことがあつていいのだろうか。困っている人を助ける、それが人間だ。少しの気持ちで、世界の人たちを救うということを知ってほしい。世界の全ての国がお互いを助け合い、平等な世界になつてほしい。いつの日かそんな世界になることを私は信じている。

たった一言で

関根中学校一年 野邊地 璃 々

私が小学四年生のときに体験した話です。

私は両親と共に東京に旅行へ行き、とても楽しみにしていたデイズニーランドの近くまで乗っていける電車に乗りました。その時乗った電車は、よくテレビに映っているように人

でござったがえしていました。

「すごい数の人だな。」

と思っていました。運良く座席が空いていたので私はそこに座ることができました。ここまでとても順調だったせいかもしれませんが、私にはとても気分が良くなり、私は周りがよく見えています。

ふと気がつくと、誰かが呼んでいる声だったので、あわてて周りを見てみると、向かいの席でお年寄りのおばあさんが男の人に席を譲ってくれないか、と頼んでいる姿が見えました。しかし、男の人はイヤホンをして音楽を聴きながら本を読んでいるのも反応をしません。何度か呼びかけても応答しないので、おばあさんはあきらめてちがう席を探しに行きました。私の両親は離れた席に座っていたので、電車を降りた時、両親にさつきあつた出来事を話してみました。すると父が、

「じゃあ、璃々が譲れば良かったんじゃないの？」

と言いました。そう言われてみるとあの時は寝ている人がほとんどで、起きている人は、私と男の人とおばあさんだけでした。

「私が譲ってあげたら…」

そう思うと少し悲しい気持ちになりました。そして、その気持ちのままデイズニーランドで遊びました。とっても楽し

にしていたはずなのに、なんだか心にぽっかり穴があいたような気分でした。

次の日、私は昨日父に言われたことを忘れないようにして、また、昨日楽しく遊べなかった分も含めてめいっぱい遊ぼうと思いました。そして、昨日、乗った電車でまた行くことになりました。人は昨日ほどいっぱいいなかったことで座席にもすんなり座ることができました。けれど、デイズニーランドに近づくにつれて人が増えてきました。ある駅に停車した時、ある親子が乗ってきました。親子は女の子とお母さんの二人で、女の子が「どこもあいてないね。」と言ったのが聞こえました。するとお母さんが「わがまま言わないの。みんな座れるわけじゃないのよ。」と言いました。

私は申し訳ないなと思いました。まるで昨日のおばあさんを見ているようで胸が苦しくなりました。そしてふと父の言葉を思い出しました。私は今なら言えると思ったので勇気をふりしぼってその女の子に言いました。

「良かったら、どうぞ。」

一瞬、親子はびっくりしていましたがすぐ笑顔になり、私にこう言いました。

「どうもありがとうね。」

その言葉は、今まで言われてきた「ありがとう」の中で一番うれしい言葉でした。それから、「自分から進んで声をか

けるのは、はずかしいけれど、勇気を出して言えばきつと誰かを幸せにすることができるといふことに気付くことができました。そして、電車を降りた時、母が私に

「えらいわね。ちゃんと覚えて。もう十分立派な大人よ。」

と言ってくれました。ちよつとはずかしかつたけどとても良い気分になりました。その日、デイズニールランドで遊んだ時間とこの電車で体験したことは一生の思い出になりました。ずっとずっと大切にしたいと思います。

音でつなぐ心

大畑中学校一年 石橋 みゆり

私は吹奏楽部に所属していて、チューバという楽器を担当しています。吹奏楽部は、イベントが多く、さまざまな所でコンサートを開いて演奏しています。その中のあるイベントで、私は音楽のすばらしさと人と人との心のつながりを知ることができました。そのイベントは、老人ホームを訪れての慰問コンサートでした。おじいさんやおばあさんが喜んでくれるような少し古い曲を選んで演奏しました。すると、曲に合わせて手拍子をしてくれたり、一緒に歌ってくれたり、私がとてもうれしい気持ちになりました。また、部員全員で「ふ

るさと」を歌った時は、感動して涙を流すおばあさんもいました。私が何気なく演奏したり歌った曲で感動してくれる人がいると思うと、少しでも今回のコンサートをめんどろくさと思っていた自分が恥ずかしくなりました。そして、自分に対して悲しくなりました。このことから、これからは一曲一曲、一音一音を心を入れて演奏しようと決めました。

そして、数ヶ月が経ち、再び老人ホームで演奏する機会がありました。その時は、始めから終わりまで心を込めて吹くことができました。おじいさん、おばあさんに元気になつてほしいという気持ちで演奏をしました。この気持ちが少しでも伝わっているといいなと思います。

この老人ホームでのコンサートを通して、思いやりとはいろいろな形があるのだと思いました。演奏したり、歌を歌うことで元気をプレゼントできるとわかったので、私にもおじいさん、おばあさんのためにできることがあるのだと、うれしい気持ちになりました。そして、自分自身も成長できたような気がします。今までは、演奏を聞いてくれる側のことを考えていなかったけれど、相手を考えるだけで演奏に力がはいります。誰かのために吹くと考えると、自然に感情が音に表れることを知りました。私たちが演奏した曲で泣いてくれた人、感動してくれた人、じっくり聴いてくれた人がいたことを忘れてはいけないと思います。また、それを自分のエネ

ルギーにして、更に心に響く演奏をできるようにになりたいと思います。

演奏する他にも、障害を持つている方や高齢者の方がいたら、優しく接していきたいです。今まで、見て見ぬふりをしていた時もあったけれど、困っている人を見つけたら、すぐに手を差しのべたり、ボランティア活動にも積極的に参加していきたいと思います。何事も気持ち大切です。「元気をあげたい」、「助けてい」という気持ちをこれからも自分の中で大切にしていこうと思います。

私にできることは、小さいけれどたくさんあります。その中でも、音楽で元気を伝えるということを頑張りたいです。聴いていて元気になるような、口ずさみたくなるような演奏ができるようになります。音で人の心と心をつなぐことができるように、音を奏でていきたいと思っています。



佳作賞

車イスにかわるプルタブ

第二田名部小学校二年 竹 林 琉 那

わたしの、おじいちゃんは、おと年の十月、のうこうそくと
言う、びょう気になり、左手と、左足がうごかなくなり、
歩くことが出来なくなりました。

それまでのじじは、トラックにやさいや、くだものを、つ
んで、うり歩く、やおやのしごとを、していました。ときど
き、わたしやおねえちゃんに、みかんやいちごを、もって来
てくれる、やさしくて元気なじじでした。

のうこうそくと言うびょう気は、頭のけっかんがつまり、
手がうごかなくなったり、歩くことが出来なくなったり、言
ばがしゃべれなくなるびょうきだそうです。

のうこうそくになつたじじは、今、一人で生活出来ないお
年よりや、じじのようなびょう気で、自分のことを一人で出
来ない人が、ヘルパーさんに手だすけを、してもらいながら
くらすしせつで、生活しています。

自分の足で歩けずに、左手でものがつかめないじじを見
て、わたしはじじを、かわいそうだなと思いました。それで
もじじは、自分のことを、自分でやるうと、一人で車イスに
のったり、うごかせる右手だけをつかいせんたくものを、た
んでかたづけたり、がんばっていてすごいと思いました。
ある日のぜん校しゅう会で「みんなであつめたプルタブが
車イスになりました。」と言う話をきいてはじめてわたしは、
プルタブが車イスを買うために、やくにたつことを知りまし
た。

どこかでだれかがあつめたプルタブが、もしかしたらじじ
の車イスになるのかもしれないと思ったので、わたしは、プ
ルタブをあつめはじめました。

プルタブをあつめることで、歩けない人のやくにたちたす
けることが出来るのなら、わたしは、これからもプルタブを
たくさんあつめたいと思います。

なかなか、じじのところに行けないけれど、あいに行つた
ときには、車イスにのるときの手つだいをしたり、車イスを、
おしてあげたり、たのしかったことやうれしかったことをた
くさん教えてあげて、じじを元気つけてあげたいです。

私のしよ來の夢

苦生小学校四年 大林 優 沙

みなさんは、しよ來の夢がありますか？私は、母が話してくれた言葉を聞き、ここ二年間で深く考えるようになりました。

母が話してくれた言葉は「世の中には、自分の好きな事をお仕事にして、毎日楽しく生活出来ている人はほんのひとにぎりの人しかいないの。どうせお仕事をするのであれば自分のしゅ味や特技を活かせるお仕事につき、毎日楽しくお仕事が出来たらどんなに幸せだろうね。でも、その為にはしよ來自分が何になるか決める時に、色んな選択しを選ぶように、もつともつと色んな勉強をしておけば良かったとお母さんみたいに後悔して欲しくないから、色んな事に挑戦して自分の特技やしゅ味を活かせるお仕事が出来るように、大きな夢と目標を持って頑張つて欲しいと思うよ。」と言う内容でした。

その話を聞いてから、私は自分なりに考えました。

私は以前から、ボランティア活動にきょう味があり、人と人とのふれあいが大好きです。

大平保育園に通っていた頃は、年に一度おおみなと園に行き、運動会やお遊ぎ会で習った歌やダンスや太こを入所者のおじいさんおばあさん達にひろうして喜んでくれるのがとても嬉しかったです。

入所者のおじいさんおばあさんのお話を聞いたり、一緒に歌を歌ったり手をつないだりして触れ合うことも楽しみの一つでした。

苦生小学校に入学してからは、そういう機会がなくて残念に思っていました。が、昨年学年行事でバンドー介ごサービスに二度訪問する事がありました。

行く前は、とてもきん張してドキドキしていましたが、施設に行き入所者のおじいさんおばあさんの嬉しそうな顔を見ると、きん張は吹き飛び歌や折り紙やぬり絵をしたりして、楽しい時間をすごせました。

私は、やはり心がホットする素敵な場所だと思いました。

今の私のしよ來の夢は、医りよう関係か介ご関係のように人の命にたずさわり、痛みや苦しみを理解してあげられて、思いやりの心を大切に出きる仕事につきたいと考えています。

大好きなひいおばあさんは今年の七月で百三才になります。が、ねたきりの状態ですが自宅介ごですごしています。

私の祖父母も高齢ですし、母もいずれは介ごが必要になる

かもしれません。

そんな大好きな家族のためにも、一生けん命に勉強を頑張
り、みんなの役にたてて、自分の好きな一生続けられる仕事
につけるよう、夢を夢だけで終わらせないように、これから
も努力し続けて行きたいと強く思います。

安心して生活するには

第三田名部小学校五年 長谷川 和 輝

ぼくには高校生のお兄ちゃんがあります。お兄ちゃんは、脳
性まひと言う病気で自分の足で歩くことができません。その
ため、小学生になった時から車いすを使って生活しています。

ぼくも小学三年生の時に、こ関節が痛くなる病気で歩くこ
とができなくなり、しばらく車いすです生活していた時があり
ました。学校では、クラスのみんなが車いすを押してくれ
たり、物を取ってくれたりと助けてくれました。ですが、車い
す生活は思っていた以上にとっても大変でした。

まず、段差がある所は前に進むことができません。もちろ
ん、階段での上り下りもできません。ドアが閉まっていたら、
立つことができないので手の力だけでドアを開けなければな
りません。重たいドアだと手の力だけでは、なかなか開ける

ことができませぬ。レールの上を通ると車輪がひっかかり動
けなくなってしまうことがあります。スロープが付いている
所もありますが、スロープの坂は見た目よりも急なので、ス
ピードが出て転とうしそうになったり、かべにぶつかりそう
になったりと危なく怖い思いもしました。お兄ちゃんも小学
生の時に、

「スロープでスピードが出て、かべにぶつかり怖い思いをし
た。」

と言っていました。

(危険だな。)

そう思ったら、外に出たいと思えなくなりました。

もしかしたら、外出することが困難または危険と思い、車
いす生活をしている人だけでなく、車いすは使っていない高
れい者や障害者も、外に出ない人が多いのではないかと思
いました。

そこで、ぼくは高れい者や障害者の人が安全に外出でき、
安心して生活できるようにしなければならぬと思いま
した。そうするには、スロープの坂をもう少しゆるやかにする
こと。段差もなくしたり、どうしても段差が必要な時は低く
したりすること。ドアも手の力だけで簡単に開けることがで
きるように、重たいドアを少なくすること。レールに車輪が
ひっかからないようにすること。そうすれば、危険だし困難

だと思っていた外出も安全で楽になると思っています。

ぼくは将来、大工になりたいと思っています。高れい者や障害者が、住みなれた所で安心して生活できるように、車いすも通りやすい段差のない広いろう下、車いすごと入れるトイレ、介護しながらゆつくりと入れるお風呂など、バリアフリーの家や公共しせつを設計し建てたいと思っています。

そうすることで、多くの人にとって住みやすい家、住みやすい社会になり、安心してくらせるようになってくれたらいいなと思います。

ありがとう

関根小学校六年 駄賃場 穂 南

私は、「ダウン症」の子のことについて、身近に感じていることをお話しします。

私は、昨年の秋まで、ダウン症という障害に対して何も考えもせず、そしてどんな症状なのかもわかりませんでした。しかし、昨年の秋、私の通っている小学校にダウン症の子が転校して来ました。私は初めて会った時は、接し方もわからず、あまり関わるのは苦手だな、と思いました。しかし、この子が転校して来たことが私の考えを変えてくれたのです。

今からお話するのは、昨年の秋から今まで私が実際に体験したことです。

今年の五月の運動会のことです。ダウン症の男の子もいっしょに参加しました。

「やっぱり障害のある人は大変だな。可愛いそう。」

と、思いました。しかし、リレーのときのことです。男の子はみんながつかないでくれたバトンを生けん命走ってつかうとしてくれます。けど他のチームの人にはたくさん追いつかれてしまいます。私は、

「みんなはどう考えているかは、わからない。だけど、がんばってつかないでくれたバトン。私たちが男の子の分もがんばってあげたい。」

そう思いました。そして、リレーの結果は、「一位」でした。みんなが協力すれば、どんな困難も克服できるんだ。と感じました。

次にお話するのは、マラソン大会のことです。私は、男の子が走らなかつたり、と中でやめてしまふんではなにか、と思いました。でも、その男の子は違いました。みんなと同じきより男の子は走りました。いくらおそくてもみんなの声援を受けて走り続ける男の子の姿を見て、「障害なんて関係ない。人は人。みんな同じ人なのだ。」そう思いました。

次は学芸会のことです。初めて舞台上で、セリフを言う学芸会でした。私は児童係だったので教室にいました。すると教室に男の子の担任の先生が来て、

「穂南さんに、学芸会の前にセリフを聞いてほしいんですけど。来てくれますか。」

と、言いました。私は、教室を出て男の子の所に行きました。すると私に、学芸会のセリフを聞かせてくれました。慣れないようで、あまりはつきりとは聞こえませんでした。が、気持ちには伝わってきました。私はとてもうれしかったです。私のために一生けん命話してくれたのがとってもうれしかったです。

これが私が実際に体験していることです。今の私は、

「人を差別してはいけません。人はみんな平等なんだ。」

と、言う考えを持ち続けていく決心をしました。そして、転校して来た男の子に一言言いたいです。大切な事に気づかせてくれて、『ありがとう』と。

ボランティア

大湊中学校一年 武田 晴海

ぼくたちは、休日の部活の日に少し早く学校に来てボラン

ティアをやっています。

ボランティアの主な内容は、地域のゴミ拾いです。秋は落葉の片付け、冬は雪かきをしています。毎回多くさんの大湊中生が参加しているのでぼくは、「地域もきれいになるし、気持ちがいいな。」と思います。

ぼくがほかにいいと思うのは、このボランティアを通して、地域のひととの交流を感じました。例えば、あいさつをする事です。ゴミを拾っている途中に町内の人たちがよく通るのですが、「おはようございます。」とあいさつすると、「おはようございます。」と笑顔であいさつを返してくれるので、ゴミを拾っているぼくたちもとてもいい気持ちになります。

ぼくは、このボランティアをただゴミを拾ったり、落葉を片付けたり、雪をかくのではなく、地域の人々の交流を大切にこれからもやっていきたいです。

ところで、ボランティアをする一番の意味は何なのでしょう。ボランティアに対する心構えはどれぐらいなのでしょう。ボランティアに対する心構えはどれぐらいなのでしょう。

ぼくは考えました。ボランティアの意味、ボランティアに対する心構えはどれぐらいなのかを。

ぼくは、ボランティアをする意味は、いろいろな物をきれいにする事だと思います。ぼくたちの中学校のように、町内をきれいにする意味もあれば、自分の心もきれいになると思

います。なぜなら、「自分はお金とかもらわないと仕事なんてできない。」という心をボランティアはきれいにしてくれません。そして自分中心ではなく周りの人の事も考えられるようになり、「こんなゴミが落ちていたらダメだ。町内の人のためにも、ぼくががんばろう。」という気持ちに変わっていきはらずです。

ボランティアをするといろんな物がきれいになります。ボランティアにみなさんも進んで参加してみたいかがですか。

さて、次の問題です。ボランティアに対する心構えはどれぐらいですか。

例えば、服装や持ち物（トングなど）がすべてそろっているけど、心持ちがない。心持ちはあるんだけど、道具がない。この2人を比べると気持ちの入り方、入る方向、が全くちがいます。

持ち物だけの人は、しゃべったりして落ちてるゴミにも気が付かないはずですよ。

気持ちがある人は、持ち物なしでも、ゴミは見つけられるし、素手でも拾えると思います。

ですから、いくら道具を持っていても、結局は気持ちがないボランティアは、やつても全く意味のないただのウォーキングになってしまいます。やる気のない人は、ボランティア

アに来るのではなく、個人でウォーキングしてもらいたいと思います。

ボランティアは、ぼくは道徳の授業だと思います。

他人の気持ちを考えて、なおかつ自分の心もきれいになります。これほど自分の気持ち人の気持ちに接する機会はほかにないと思います。

まずは、自分の家の周辺、次に町内など個人でやるのもいいでしょう。一人がいやなら友達や近所の人をさそうのもありだと思います。ボランティアのやりたい気持ちがあれば、誰だって、ボランティアをやれます。みなさんも、ボランティアに参加してみたいかがですか。

今できること

大湊中学校一年 藤原 紬

私の家族は、みんな元気です。重い病気にかかったり、介護をしたり、などの体験が、私にはまだありません。

「福祉」という言葉をよく聞くのですが、その意味を考えたことはありませんでした。福祉とは、すべての人が幸せに生きられるようにすることだと知りました。それは、とても難しいことだと思います。

私は最近、足の悪い人をよく見かけます。登校中にも車から見かけますが、私は何もできません。つえをつけて歩いているのを見ると、とても歩きづらそうです。雪が積もるとますます歩きづらそうです。先日、足の悪い親戚のおばさんが家を訪ねてきました。その人はつえをつかなくても歩くことができます。しかし、座るとひざが痛みつらいのだそうです。話を聞いていると、家に来るまでに坂があつて、その坂を下るのに何十分もかかったと、言っていました。

その坂は、何歩か歩けば家につくような、とても短い坂です。何十分もかかるなんてありえないと、私はおどろきました。そして、改めて実感しました。私にとっては当たり前に行けることを、当たり前前に行きず、生活に困っている人がこんなに身近にいるということ。

そんな人たちのために、何かできることはないのかと、私は最近よく思います。

ボランティア、よく耳にする言葉です。これは、義務でも強制でもなく、自主的に社会に無償で奉仕することなのです。この活動は学校でも行っているのです、簡単に参加することができます。

私がこの活動に参加するようになったのはつい最近のことです。学校に早く着いたので、参加してみようと思ったのです。私は初めて地域のごみ拾いをしました。思っているより

たくさんのごみが落ちていて、おどろきました。集まったごみを見たときは、こんなにごみを町に捨てる人がいるんだ、と、とても残念に思いました。それと同時にそれだけのごみを拾って、少しでも町をきれいにできたと思うと、嬉しくもなりました。

秋には落ち葉を拾ったり、冬には雪かきをしたり、大変ではありますが、楽しんで活動することができます。朝なので、散歩をしている町内の人や通勤中の人に会うことが多いです。その人たちとあいさつをしたり、会話ができると、とてもすがすがしいです。ボランティアをしながら地域の人とふれあえることは、とても良いことだと思います。

このように、ボランティアは地域の人々のためにもなるし、自分自身もとても良い気持ちになります。なので、これから学校で行われているボランティアを続けていきたいです。そして、機会があつたら、地域で行っているボランティアにも参加したいです。

この活動は、私が見た足の悪い人や、ほかの障害者のためにはあまりなっていないと思います。しかし、その地域に住む人のためにはなっています。なので、この活動を続け、地域の人々との交流を深めたいです。そして、いつかは障害や何かで困っている人に声をかけ、助けてあげられるようになりたいです。

家族全員が元気なことはとても良いことです。しかし、家族が病気になったときや歳をとって、介護が必要になる時は来ると思います。なので、これからもつと福祉について考えていきたいです。

自分達の海をきれいに

近川中学校一年 立花桃香

私達近川中学校の生徒は、奥内小学校とむつ養護学校の人達と協力して、毎年近くの海の清掃活動を行っています。

私は去年まで、小学生としてこの活動を行っていました。今年から中学生なので、「よし、がんばるぞ。」と、いつもより気合いを入れてがんばりました。

私の学校の近くにある海は、毎年たくさんのゴミが落ちています。中には、空きビンや空きカン、外国から流れてきたものなど、危険なものがたくさんあります。私は、小さい時この海で足に何かが刺さり、けがをしたことがあります。その時はとても痛かったです。海には小さい子がけつこう来るので、けがをしないように、これからもしつかりゴミを拾って私達の海をとてきれいで使いやすい海にしたいと思います。

このクリーン活動には、小中学校・養護学校の他に、地域の方が毎年来て下さって、私達と一緒に、海をきれいにして下さいます。地域の方が協力して下さいのおかげで、たくさんの人が集まり、少しの時間でどんどんきれいになっていきます。海には、危険なものや、重いものがかかりあるので、とても助かっています。毎年来て下さるので、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私は、これからもこのクリーン活動をしつかりがんばりたいと思います。

そして、クリーン活動には、三校が交流して仲良くなるという目的もあります。小中学校と養護学校三校の交流は、一年間に二〜三回くらいしかないのですが、私はいつもとても楽しみにこの日を待っています。みんなと協力しながら活動すると、とても仲良く楽しくクリーン活動をすることができます。普段はなかなか会えない友達に会うことができるので、とてもわくわくします。

近川中学校の生徒は、小学生・養護学校の人が帰った後も残り、一時間ほどさらにクリーン活動をします。近川中学校の人だけだとかなり人数が少なくて大変ですが、きれいな海を見たいので、すごくがんばることが出来ます。私が、クリーン活動で一番苦手なことは、海草の片付けです。毎年浜辺に海草がたくさん集まっているので、とても大変です。かなり重いし量が多いので、何度も何度も運ばないと終わります。

せん。でも、片付けていくうちにどんどんきれいになっていく所を見ると、心がとてもすっきりします。私は清掃があまり好きでもないし、得意でもないけれどクリーン活動はやりがいがあつて大好きです。これからは、普段の清掃も少しずつ得意にしていけたらいいなと思いました。

私は、クリーン活動で、協力することの大切さを学びました。どんなことでもみんな協力すれば、やりとげられると思います。それは、クリーン活動でも、普段の生活でも同じことです。一人で全てをやるよりも、協力したほうが早く丁寧にできることもあります。時には、誰かに頼ることも大切だと思います。私は、一人だともできないような人間かもしれません。でも、たくさんの人を助けて、たくさんの人に助けられて毎日を生きています。クリーン活動は私に、協力することの大切さを教えてくれた活動です。私は、残りの二年のクリーン活動を、全力でがんばっていきたいと思います。

福 祉

大湊中学校二年 木 村 結 衣

私は以前から、福祉という言葉の意味をあまりきちんと理解していませんでした。以前の私は、福祉とは、高齢者の方

や障害者の方の介護や支援のことだけだと思っていました。しかし、自分で福祉について調べてみて、福祉とは、すべての人が幸せに生きられるようにすること。これが、福祉の本質だそうです。福祉には、社会福祉、児童福祉、高齢者福祉、障害者福祉など、多くの分野があります。それぞれいろいろな意味があるのだが、最終的には、福祉の本質である、すべての人が幸せに生きられるようにすること。につながっていくのではないかと私は思いました。ほかには、バリアフリーやユニバーサルデザインも福祉です。バリアフリーは障害をもっている人のために、ユニバーサルデザインは、誰にでも使えるように考えられています。このように、身近なところにも、福祉が人の役に立っていて、暮らしをよりよいものにしてくれるものだと思います。

私が小学校中学年くらいの時のことです。冬、私はバス通学をしていました。その日はちょうどバスが混んでいて、座席に座れない人もたくさんいました。その時、あるお年寄りの夫婦がバスに乗りました。その夫婦は手すりにつかまって立っていました。そこで私は、席を代わらなきゃと思ったが、勇気を出せずにいると、近くにいた同年の男子が立って夫婦の方へと行きました。するとその男の子は、

「僕のとこどうぞ。」

と夫婦に言いました。その夫婦は笑顔で、

「ありがとう。」

と言いました。今思うと、知識だけでなく、行動力も必要だと、今改めて実感しました。福祉に関する仕事は、介護福祉士、ホームヘルパー、ケアマネージャー、福祉住環境コーディネーターなどさまざまあることを知りました。介護福祉士は、お年寄りや、体に障害をもっている人の助けをする仕事です。ヘルパーは、家や老人ホームなどの生活の手助けを行う仕事をする人のことです。現在、日本では、高齢者がどんどん増えているため、介護や福祉の仕事をする人が必要になっていくと思います。日本は、少子高齢化社会といっていて、高齢者がどんどん増加しているのです。介護を必要とする高齢者が増えていっているのだと思います。その他、ケアマネージャーは、介護を必要としている人が何をしたいのか、何をできるのかを考えてこれからの計画をたてるのがケアマネージャーです。福祉住環境コーディネーターは、もっと住みやすい安全な場所を作ろうと勉強する仕事です。この四つの仕事について、共通して言えるのが、はたらく人が少なくなってきたら、介護や福祉の仕事をする人が必要になってきているということを知り、介護、福祉にたくさんの方が興味をもってくれたらいいなと思いました。

今回、福祉について改めて考えてみて、福祉の本当の意味を学ぶことができました。福祉とは、すべての人が幸せに生

きられるようにすることなのです。そして、その「福祉」の中心にあるのが、命、暮らし、生きがいだということを改めて知ることができました。これからは、少しでも「福祉」を意識して生きて行けたらいいなと思います。

盲 目

大湊中学校二年 下山 詩織

「盲目」それは、とても恐ろしいものです。

みなさんは、目が不自由になった時の事を想像したり、体験した事がありますか。

私は、どちらともした事があります。

昔、テレビを見て想像した事の話です。

そのテレビでは盲目の女性を取り上げられていました。

女性は、中学校二年生の時に両目の視力を失ってしまったそうです。

それは、病気が原因でした。

私は、幼いながらに必死で考えました。ごはんを食べる時は、勉強する時は、歩くときは…。

どれもこれも想像するだけで大変そうなのがわかります。

しかし、その女性は、テレビの中で家族とともに笑ってい

ました。

そして、こんな一言を言いました。

「最初の頃は、怖かったし、死にたいとも思いました。しかし、両親をおいて死ぬわけにはいかないと思い、受け止めました。時間はかかりましたが、今は、とても幸せです。」と、言っていました。

私は、すごいと思った事と同時に、なぜ笑っていられるのだろうと思いました。その時の私はよくわかっていなかったからです。

体験したのは、小学校三年生の時です。

総合的な学習の時間の事です。

目隠しをして校内を歩くという事を体験しました。

目隠しをされた時、真っ暗で、とても怖かったです。

ペアの人の人しつかりとつかまり歩きました。歩く事はまだ出来たのですが、階段は足がすくんでしまいました。一歩でも足を踏みはずして転んだりでもしたらどうしようと考えてしまい、よけいに怖くなりました。

ペアの人の支えもありなんとかおろることができました。

途中、町でもよく見かける点字がありました。学校の教材だったのでそんなに長い距離の物ではありませんでしたが、点字の上を歩いている時は、真っすぐ歩けるので少しだけホットしました。

そして、またしても階段です。今度はのぼらなくてはなりません。

おろる時よりも早くのぼっていて順調だと思っていた矢先に、

「キャー！」

階段でつまずき、前のめりに転んでしまいました。ペアの人は転ぶことはありませんでしたが、もし私が手をはなさなかったら、と考えると怖いです。

幸い、ケガはまぬがれましたが、それ以降は、怖くて怖くて歩くのさえやつとでした。

しかし、ペアの人が優しく声がけをしてくれながら教室までつれていってくれたので何とかなりました。

この二つの想像と体験により、わかった事が一つあります。

それは、目が不自由になっても、支えてくれる人がいるから生きていられるという事です。

周りに人がいる生活があたりまえの私達は、周りの人の大切さをもっと知らなくてはなりません。

そして、盲目の人だけでなく、体が不自由な人を助けなければなりません。

私は、体が不自由な人達が笑って生きられるような社会をつくりたいと思っています。

そのために、今のうちから頑張っていこうと思います。

身近な人から

大畑中学校二年 片山 瑞貴

私は今、祖母と母と三人で住んでいます。祖母は、足が不自由で、最近、耳がよく聞こえない上に、物忘れが激しくなってきました。母は、リウマチという病気で毎日、体を痛そうにしています。しかし、私は、祖母と母に対していつも、反抗的な態度をとってしまいます。母が最近、心臓の調子も良くないと知りながらも、ついつい反抗してしまい母や祖母を困らせています。そして、最後は、いつも自分の言った事に後悔し、時々自分が嫌になります。その時、私はいつも、「私の事なんか生まなきゃよかったのに。」

と言ってしまう。すると、母からは、「なんで、そんなことを言うの?」と返ってきます。この言葉には色々な意味が込められています。それは、本当は私には、二人兄がいました。しかし、どちらも亡くなってしまいました。わかっていても、つい思ったことをすぐ口に出してしまうのが、私の悪いくせです。いつも、同じ事を言って、母を傷付けてしまいます。そろそろしつかりしないといけないと思いますが、同じことを繰り返

してしまいます。

私とケンカした時、母は泣いています。その度に、私は、母の涙をもう見たくないと思います。だから、自分のできる事、やるべき事はしつかりやっていこうと思います。

また祖母は、先ほども説明した通り、足が悪く、耳が聞こえづらいう上に、物忘れが激しくなっています。私は、つい祖母に甘えて皿洗いを任せたりしてしまう事があります。その時、祖母は、笑顔で「いいよ」と言ってくれますが、いつも申しわけない事をしてるなと思います。

しかし、こんなにも優しい祖母に対して、私はいつも口ごたえをしてしまいます。そんな時でも、祖母は、笑顔で受け止めてくれます。でも本当は心の中で悲しんでいると思うと、私も悲しくなります。しかし、祖母は、耳が聞こえない自分、何度も同じことを繰り返して言わなければならぬし、物忘れが激しいので、同じことを何回も聞かれます。私は、このような時、だめだとわかりながらもいらしていただきます。そして、口ごたえをしてしまいます。しかし、人間誰でも、年を取ると、おじいちゃん、おばあちゃんになり、耳も聞こえなくなつて、物忘れも激しくなります。私は、やつと最近、このような考え方をすることができるようになりました。

私が今後気をつけたい事は、三つあります。一つ目は、そ

の場での一方的な感情で、物事を言っただけとはいけないということ。二つ目は、相手の立場になつて物事を考えるということ。三つ目は、なによりも、思いやりの心を忘れないことです。私は、今の生活がこれからも続いてほしいと心から思います。ですので、これからも、明るく、楽しい家庭になるように、わが家を支えていきたいと思ひます。

ひいおばあちゃんありがとう

脇野沢中学校二年 北村 しおり

昨日、十二月三十一日大晦日ひいおばあちゃんが亡くなりました。

ひいおばあちゃんは明治四十四年生まれ百三才でした。百才を越えたので内閣総理大臣や宮下市長から表彰状をいただきました。おばあちゃんはとっても器用なので小さなそでなしやお人形をおぶる時の「たな」というのを作つて下さいました。八十才をすぎてだんだん体が思うように動かなくなり寝ている時間が増えてからは、お見舞に行くこと

「よく来たなあ、よく来たなあ。」

といい、手を握りながら

「ありがとう、ありがとう。」

と言つていました。そして、私や姉のために何かくれるものはないかと自分の持ち物の中を探していました。そして帰る時には必ずハンカチや小さな人形、えんぴつなどを持たせてくれたのです。

いこいの里へショートステイをするようになってだんだんお見舞に来てくれた人が誰かわからなくなりました。それでも私達が行くと

「おめえ、誰だべ。」
と聞き

「徳広（父）の娘です。」
と答えると、

「おうおう、よく来たなあ。」

と手を握つてくれました。施設の人達から何かしてもらつた
び

「ありがとう、ありがとう。」
と言つていたそうです。

誰からも愛されて大切にされたのはいつも「ありがとう」という気持ちがあつたからだと思います。

でも、私は

「ありがとう。」

と言われるたびにただ顔を見に来るだけなのと思つていました。

「こんなに素直に『ありがとう』という言葉と言える人って
すごいなあ。」

と思いました。

そんな優しいひいおばあちゃんにたくさんのお話をしても
らったり、教えてもらったのに、私は何一つ恩返しができな
いままおばあちゃんも亡くなってしまいました。

でも、そう思っていることをお母さんに言うと

「しおりが一生懸命、勉強したり部活をがんばって毎日楽し
く過ごせることがなによりの恩返しだと思うよ。それに、お
ばあちゃんの顔を見に行ったり、お話をすることもひいおば
あちゃんは嬉しかったと思うよ。」
と言われました。

今一緒に住んでいる祖母から聞いた話ですがお年よりと話
すのが嫌だという子供やお年よりが作ったご飯は汚いと言っ
て食べない子もいるそうです。

私はその話を聞いてびっくりしました。

私は今までおばあちゃんが作ったもので「汚い」とか「ま
ずい」などと思ったことはありません。

私達はいずれ歳をとっていきます。できないこともどんど
ん増えていくし体も動かなくなっていくます。

だからこそ、自分ができることを小さな事でもいいからし
てみたり、できない事を責めずに手助けをしていきたいと思

います。

そして、私が誰かに手助けをしてもらった時にはひいおば
あちゃんみたいに「ありがとう」と言える人になりたいです。

それが「福祉の心」につながると思うからです。



「第44回むつ市福祉作文コンクール」応募内訳

1. 小学校

No.	学 校 名	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
1	第一田名部	1	0	0	1	1	2	5
2	第二田名部	0	1	0	1	0	0	2
3	苦 生	1	0	0	10	0	3	14
4	第三田名部	0	0	1	0	4	0	5
5	関 根	0	0	0	0	4	2	6
6	大 湊	0	0	3	0	0	0	3
7	大 平	0	0	0	0	0	1	1
8	川 内	0	0	0	0	1	0	1
9	二 枚 橋	0	0	0	0	0	1	1
10	脇 野 沢	0	2	0	0	1	1	4
	合 計	2	3	4	12	11	10	42

2. 中学校

No.	学 校 名	1年	2年	3年	合計
1	大 湊	18	19	0	37
2	む つ	33	42	0	75
3	関 根	7	7	0	14
4	近 川	7	14	0	21
5	大 畑	4	6	0	10
6	脇 野 沢	10	11	0	21
	合 計	79	99	0	178

合計応募数

220 作品